

埋蔵文化財包蔵地について

埋蔵文化財包蔵地とは、遺物や遺構が埋蔵されている土地のことである。現在、黒石市内には百八十四ヶ所の遺跡が確認されている。その分布状況を見てみると、遺跡は主に水が豊富で、平坦な丘陵地に所在する。

これまで発掘調査した遺跡の数は十一ヶ所であるが、重要な遺跡三ヶ所について紹介する。

◎花巻遺跡

花巻遺跡は、学史的に有名な遺跡である。この遺跡が文献に最初に登場するのが寛政十年（一七九八）に作成された、菅江真澄の『追柯呂能通度』である。菅江は、三河（現在の愛知県）出身の紀行家である。三十才の時に遊歴の旅に出るが、二度と三河に帰ることはなかった。晩年は秋田領内で過ごし、七十六才の生涯を閉じた。

菅江の遊歴の目的は、未知の国々に対する探求心と名所巡りであった。彼は各地の生活や風俗習慣の様子を日誌とスケッチで描いている。その中には三内丸山遺跡や亀ヶ岡遺跡、花巻遺跡がある。いずれも多量の遺物が出土しているが、その状況を細かくスケッチしている。



石棺墓



発掘調査風景（昭和62年）

考古学が学問として認められると、多くの考古学者が輩出された。その中に、中谷治宇二郎なかやじゅうじろうがいる。中谷は、大正十三年（一九二四）に東京大学人類学科へ入学すると、西洋考古学の考え方をとり入れた斬新な方法論を用いて、土器編年を確立させた。中谷の研究は次第に評価されるようになった。

昭和三年（一九二八）に中谷は縄文時代の人骨と埋葬の研究のため東北地方を訪れるが、秋田県大館市で菅江真澄の文献を見る機会があった。この文献の中で多量の円筒土器えんとうどきが出土している花巻遺跡に注目し、発掘調査を決意する。佐藤雨山の案内で黒石市を訪れ、わずか二日間であったが、発掘調査を行った。発掘の結果、多量の円筒土器が出土している。中谷は、東京へ帰ると花巻遺跡に関する論文を発表した。その中で、円筒上層式土器に対して「花巻式土器」と命名した。しかし、中谷はフランス留学するが、帰国後三十五才の若さでこの世を去る。

花巻遺跡は、大正から昭和初期において考古学界の代表的

遺跡であった。また、この時代には中谷をはじめ、工藤彦一郎や佐藤しとみ郁らが花巻遺跡に関する論文を書いてゐる。しかし、中谷の若くしての死は、花巻遺跡のみならず、「花巻式土器」という名称まで自然消滅させてしまった。

昭和六十年（一九八五）と六十二年（一九八七）に黒石市教育委員会で花巻遺跡の発掘調査を行った。調査の結果、竪穴住居跡一棟、石棺墓十基などが発見されている。縄文時代前期から後期にかけての大集落が存在したと思われる。

◎甲里見（二）遺跡

黒石市内には奈良時代の遺跡は少ないが、平安時代の遺跡は数多く分布している。

青森県内の遺跡の分布状況も同じように平安時代になると数多くの遺跡が分布するようになる。遺跡が増大する原因は、農業を中心とした経済生活が安定したことと、律令国家が確立するにつれ、人間の往来が激しくなったためであろうと思われる。

昭和六十三年（一九八八）に甲里見（二）遺跡の発掘調査を行った。調査の結果、三棟の竪穴住居跡が発見され、このうち一棟が焼失家屋である。出火の原因は後で述べるが、カマドからは土馬どば、手捏ね土器てづくどき、勾玉まがたまなどが出土している。これらの遺物は、律令祭祀遺物りつりょうさいいぶつとよばれるものである。

律令制が布かれた西日本では、日常生活の不安と恐怖から魔除けや信仰が生まれると、それに伴



土馬（横向）



土馬（真上）



発掘調査風景（昭和63年）

う遺物がさかんに造られた。これらの遺物を律令祭祀遺物という。例えば、人面土器^{じんめんどき}、人形^{ひとがた}、鳥形^{とりがた}、ミニチュア土器、齋^い串^{くし}、勾玉^{まがたま}などがある。

甲里見（二）遺跡から出土した律令祭祀遺物のうち土馬は東北地方でもあまり出土例がなく、極めて貴重な遺物である。馬が大陸から日本に入ってきたとき、馬が水辺で飼われていることから水神信仰の思想も導入された。以来、馬は雨乞いの神様として崇められた。平安京、平城京などの井戸跡や溝状遺構から土馬が多量に出土するのはこのような理由からであろう。また、馬は貴人の乗り物であることから、死者を天空へ運ぶ生き物や、疫病神^{やくびょうがみ}を乗せる物として信仰されるようになった。

これに基づいて甲里見（二）遺跡から発見された焼失家屋について考えてみる。カマドから律令祭祀遺物が出土していることから何か魔除けの可能性がある。そして、焼失家屋から柱や家財が発見されなかったことから自ら家に火を付けた

可能性がある。住居に住んでいた人間が何らかの疫病にかかり、これが伝染しないようにカマドに遺物を放り込み、火を付けたと思われる。また、土馬が水関係以外の信仰に用いられたことから疫病防止と考えるべきであろう。

青森県内で土馬が出土しているのは、甲里見(二)遺跡以外、八戸市岩ノ沢平遺跡のわずか二例だけであるが、このことは、青森県にも少なからず律令制の影響が及んでいることを示すものである。

◎一ノ渡遺跡

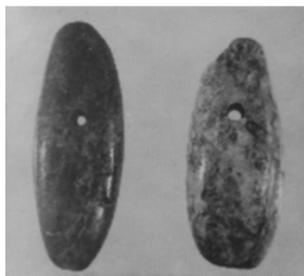
縄文時代後期(約三千五百年前)には、日本海側を中心に「巨石文化」が栄える。例えば、青森市小牧野遺跡、弘前市大森勝山遺跡、秋田県鹿角市大湯環状遺跡などのストーン・サークルのことである。これらの遺跡の特徴は、大きい石を直径二〇〜三〇メートルの範囲に並べている。黒石市でも、これに匹敵する遺跡が発掘された。一ノ渡遺跡いちのわたりである。

一ノ渡遺跡は、昭和五十七年(一九八二)に発掘調査が行われたが、調査の結果、総数百二基の大規模な配石遺構群が発見された。配石遺構群には組石、列石、集石、立石などがある。

組石は二基発見された。うち一基は、縦一四メートル×横三メートルの範囲に大小の礫や平らな石を並べたもので、同じ高さに平面を保つようにしている。もう一基は、同じように水平に石を並



組石（祭壇として使用された可能性がある）



硬玉製大珠



立石

べているが、石の下に土坑を掘っている。この土坑跡の使用目的は不明である。

また、比較的大きい石や棒状の石を立てた「立石」と呼ばれる遺構がある。立石の特徴は、立てた石のまわりに小さい礫をサークル状に並べるところである。ストーン・サークルのミニチュア版である。このような遺構が三ヶ所確認された。

このほかに、石を一列に並べた列石や、不定形に並べた集石の遺構がある。これらの遺構は約一万平方メートルの範囲の中に無造作に並べられている。これらの配石遺構群の利用目的は、二基の組石を祭壇として利用した大規模な儀式を行なったものと考えられる。

これらの遺構のほかに、貴重な遺物が出土している。硬玉製大珠である。硬玉製大珠とは、ヒスイ製の装飾品で、形がカツオ節に似ていることから「鯉節形大珠」とも呼ばれている。この大珠には紐を通す穴が穿けてあり、首飾り

として使われたと思われる。

大珠の原産地は、新潟県青海町であることが判明した。三内丸山遺跡では今からおよそ四千五百年前に新潟県のヒスイが搬入されている。また、県内各地でも新潟産のヒスイが搬入されているが、交易ルートや流通機構については解明されていない。しかし、一ノ渡に住む縄文人も北陸の縄文人と交流していたことは事実である。

黒石市内には、巨石文化の影響を受けたと思われる遺構がもう一つある。それは、花巻遺跡の石棺墓である。石棺墓とは、数枚の平らな石を並べて造った柩ひつぎで、この時期には二次埋葬が流行するが、甕棺に収める前段階に石棺墓に埋葬させたものと考えられる。しかし、これら巨石文化は後期初頭に栄えるが、わずか数百年で消滅する。縄文時代の謎である。